追放者の矜持 上

ヴァルデマールの絆

マーセデス・ラッキー

訳／澤田澄江

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

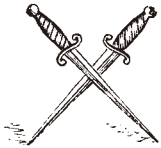
Exile's Honor
A Novel of Valdemar

by

Mercedes R. Lackey

Exile's Honor ©2002 by Mercedes R. Lackey
Japanese translation right arranged with the author,
c/o BAROR INTERNATIONAL, INC.,
Armonk, New York, U.S.A.
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.
Japanese edition ©2012 by Chuokoron-Shinsha, Inc.

挿絵　竹井



目　次

プロローグ　9

第一部　追放者の決断

第一章　30
第二章　51
第三章　70
第四章　93
第五章　112

第二部　テドレル戦争

第六章　135
第七章　157
第八章　183
第九章　209
第十章　229

エルカース
ジェイダス
デソール
登場人物
紹介
タラミール
アルベリッヒ

ミステ
ミリリン
クラザック
センダー王
セレネイ

2001年9月11日に命を落としたニューヨーク市消防局の隊員に捧ぐ

Squad One（第1分隊）：
Brian Bilcher
Gary Box
Thomas Butler
Peter Carroll
Robert Cordice
David Fontana
Matthew Garvey
Stephen Siller
Edward Datri
Michael Esposito
Michael Fodor
James Amato

Squad 18（第18分隊）：
Eric Allen
David Halderman
Timothy Haskell
Andrew Fredericks
Lawrence Virgilio
William McGinn

Squad 41（第41分隊）：
Thomas Cullen Ⅲ
Robert Hamilton
Michael Lyons
Gregory Sikorsky
Richard VanHine
Michael Healey

Squad 252（第252分隊）：
Tarel Coleman
Thomas Kuveikis
Peter Langone
Patrick Lyons
Kevin Prior

Squad 288（第288分隊）：
Ronnie Gies
Joseph Hunter
Jonathon Ielpi
Adam Rand
Ronald Kerwin

Safety Battalion 1（第1保安大隊）：
Robert Crawford

Fire Marshal（消防署長）：
Ronald Bucca

Special Operations（特別指令部隊）：
Timothy Higgins
Michael Russo
Patrick Waters
Raymond Downey

Citywide Tour Commander
（市全域統括本部長）：
Gerard Barbara
Donald Burns

追放者の矜持 上

ヴァルデマールの絆

プロローグ

シルヴァーが苛立たしげに足を踏みならした。水平に張られた一本の綱に等間隔に繋がれている馬の一頭がふいに動いて、後軀にぶつかってきたのだ。アルベリッヒが牡馬の首を軽く叩きながら声をかけて落ち着かせると、顔を後ろに向けて若き指揮官の髪に息を吹きかけた。アルベリッヒはふっと微笑んだ。この陣営で友と呼べるのは、おまえだけかもしれないな。

（おれの失敗を望んでいないのも。ほかの奴らは、しくじればすぐにでも襲いかかって切り刻んでやろうと待ち構えている）

カース国軍における将校は、日々敵国と戦いながら、常に自分の背中を気にしなければならない。

シルヴァーは牡馬にしては驚くほど穏やかで、戦闘でも、こうして手入れをしているときでも、問題を起こしたことがなかった。その点は、アルベリッヒにとって好都合だった。問題を起こしていれば、〈太陽神〉ヴカンディスの〈代弁者〉から授かった馬だとはいえ、去勢するか、もっと御し易い馬と交換していただろう。苦労の種は尽きないのだ。馬の行動を気にしている暇はない。

それにしても、これほど美しく筋肉の隆々とした馬をどこから連れてきたのか。〈代弁者〉は、敵の手から解放してやった馬のなかから、シン＝エイ＝イン産だというこの馬をアルベリッヒのために特別に選んだといった。つまり、〈国境〉付近で絶えず起きている武力衝突の戦利品だ。

シルヴァーが山賊の巣で育てられた馬でないのは確かだ。山賊の馬は、その所有者と同じく評判が悪い。奴らから解放した馬は、たいていひどい扱いを受けて弱っていて、飼育するに値しない。おそらく

レスウェランを通じてメンメリスから連れてこられたのだろう。我らの王は、馬を育てるシン＝エイ＝インという残忍な遊牧の民と何かしらの繋がりがあるという噂だ。

ともかく、長く戦火を共にしてきた忠実な牡馬スモークを数週間前に失ったときには、山賊から奪ったことのある頑固で扱いにくい牡馬よりも、せいぜいましな程度の馬を与えられるだろうと予測していた。

だが、運命の神は別の道を用意していた。〈代弁者〉は、アルベリッヒを将校に任命するとともに、優れた代替馬を授かる〝栄誉〟を与えた。任命状には、シルヴァーが軽騎兵隊の指揮官に申し分ない騎馬であることを証明する書類が添えられていた。彼が上層部に贔屓されている証であり、戦場での働き以外のところで気に入られていると暗に示すものでもあった。

（諸刃の剣とは、まさにこのことだ……）

任命状と騎馬はどちらも、アルベリッヒの重荷となった。将校になったからといってどの部下からも支持されるわけではない。それにこの馬は、いかなる状況で敵と対峙しようとも、ひどく目立ってしまうだろう。白馬だぞ？　背中に的を貼りつけて戦うようなものだ。

〈不吉な色だ。ヴァルデマールの邪悪な〈使者〉も白馬に乗る。あの青い瞳の獣は、悪魔か魔法使いの化身なのかもしれない。司祭たちもそういって、乗り手を〈悪魔の騎士〉と呼んでいるではないか〉

シルヴァーがふたたび鼻面を寄せてきた。婦人用の牝馬に劣らぬ気立てのよさだ。鼻を掻いてやると、満足そうに息を吐く。こんな風にいつも気を落ち着けていたいものだ。そもそも将校に任命される前から、十分に危うい立場にあった。それが、今では――。

馬の背にふたたびブラシをかけようとしたとき、アルベリッヒは肩甲骨と肩甲骨とのあいだに、気味

の悪い、突き刺すような視線を感じた。
　肩越しに振り返り、ハダール中尉の憎悪に満ちた視線を受け止める。中尉はさっと目を伏せて馬の脇腹にせっせとブラシをかけはじめたが、彼の青い瞳が憎しみと怒りに燃えていたのをアルベリッヒは見逃さなかった。
　ハダールやクラウスを差し置いて将校に任命され、駿馬を与えられても、少しもありがたくない。経験はともかく、兵役の年数でいえば彼らのほうが上だ。アルベリッヒが先に昇進するとは夢にも思わなかっただろう。上層部から辞令が下されるまでの一週間、ふたりは互いに牽制し合っていた。
（決闘でもして、共倒れしていればよかったのだ）
　アルベリッヒは腹立ちまぎれに考えたが、すぐに気持ちをぐっと堪えた。ヴカンディスの司祭には、人の思考を読み取れる者がいるという。ハダールが昇進を逃したのは、こんなことを考えていたせいかもしれない。
　今回の昇進は、試練を与えられたも同然だった。野心に燃える若きアルベリッヒ中尉を深い池に突き落とし、試練に耐え切れるか試しているのだ。耐え切れば、それでいい。さらなる昇進に値すると見なされ、ゆくゆくは司令官にまで上り詰めるかもしれない。
　耐え切れなければ――かなりまずい状況に陥る。野心に溺れるか、あるいは部下の陰謀を見極めて賢く回避できなければ、この地位に相応しくないと判断されるのだ。
　これこそ、カース国軍だ。常に警戒して過ごし、必要とあらば、隙のある仲間の背にそっと短剣を突き刺し、ほかの邪魔者に罪を着せる。
　真に権限を有する〈太陽神〉の司祭たちは、微笑みながら一部始終を傍観し、〈唯一神〉がお示しになるのと同じ公平無私な超然とした態度で、庇護や罰を与える。カースは苛酷な土地であり、〈太陽神〉は厳しい神だ。そして〈太陽神の司祭〉は、どちら

にも劣らず冷酷だ。

メンメリスや悪魔の国ヴァルデマールと接する〈国境地帯〉で山賊を一掃する軍事作戦において、アルベリッヒは自らの力で功績を残してきた。そもそも、ハダールとクラウスをふたり合わせたところで、アルベリッヒの半分も活躍していなければ、彼ほど精力的に戦ってもいない。この地位は己の力で手に入れたのだ。彼は今一度自分にいい聞かせた。呼応するかのように、ブラシの下でシルヴァーが足を踏みかえて重心を移した。

春の日差しが照りつけている。風がそよとも吹かないせいで思いのほか暑い。ハダールのギラつく視線のような暑さだ。

（ハダールめ、悪魔に憑かれたか）アルベリッヒにしてみれば、今の地位をうまいこと手に入れたなどと負い目を感じる必要はなかった。ふたりがこれまでの兵役生活で成し遂げた以上の手柄を、彼は最初の一年で立てたのだから。同じ中尉の位にあった者のなかで、彼ほど短期間に多くの地域で山賊を排除した者はいない――だから、アンバーグ指揮官が山賊団に遭遇し、矢を浴びせられて倒れたのを受け、〈代弁者〉がふたりの候補者を差し置いて彼を新たな指揮官に任命したときには、当然のことながら、すべての兵士が進んでアルベリッヒに付き従うかに思われた。

数年のあいだ、カースは山賊をわざとのさばらせていた。ヴァルデマールやメンメリスの農民に奴らの目を向けさせ、カースの住人に害が及ばないよう画策したのだ。愚かな方策だ、とアルベリッヒは考えていた。山賊は決して信用ならない。だからこそ奴らは山賊なのだ。信用に足る輩ならば、軍隊に属しているか、寺院の護衛隊に入っているか、あるいは傭兵になっているかしているはずだ。

この方策の危険な側面を、アルベリッヒは士官学校の候補生時代に受けた初等戦術の講義において、すでに見破っていた。教師のひとりに告げたことす

らあった――もちろん、質問という形でだが。士官候補生が意見することは認められていない。彼の質問は、教師に完全に無視された。おそらく、〈太陽神の司祭〉の判断が神の啓示を受けたものではないと、仄めかすだけでも賢明ではないと判断したのだろう。

山賊が威力を増したら面倒な事態になるだろうというアルベリッヒの予測は、やがて適中した。今や山賊はヴァルデマールを刺激するという役割を遥かにはみ出し、カースにまで害を及ぼしている。カースとの暗黙の合意を完全に無視して、手当たり次第に攻撃を仕掛けてくるようになった。単身の旅人から荷物を奪ったり一軒の農家を狙ったりするだけに留まらず、ついに村全体を襲いはじめて、ようやく権威者たちは山賊を退治すべきと考えるようになった。

アルベリッヒは若き日のほとんどをカースの軍事学校で過ごし、これらの問題が露見した頃に騎兵隊の士官候補生としての訓練を終えた。聖職者以外の者が上り詰められる最高の地位は軍の司令官で、その最高権威者ですら〈代弁者〉と呼ばれる特別な〈司祭〉たちの手中にある。兵卒は大部分が徴集兵からなり、彼らが士官に引き立てられることはない。〈代弁者〉は公言こそしていないものの、兵卒が権力を手に入れてもなお忠誠を保ち続けるとは考えていないのだ。

アルベリッヒや、彼と同じ士官候補生の多くは、十三歳で選ばれた。毎年、ひとりの〈代弁者〉が各地を回り、体が丈夫で頭の回転が速い子どもを選びだして士官学校に送りこむのだ。もうひとつ、少年を選ぶ際の大事な要件がある――少なくとも半数を貧しい家庭から選ぶということだ。そうすれば、少年の親は自分の子どもに出世する機会が与えられたことを〈代弁者〉に感謝するだろう。

アルベリッヒは、すべての条件を満たしていたし、あらゆる武器をいとも簡単に使いこなす様は同期生

が羨むほどであった。さらに、学術的な知識においても難なく吸収してしまっているようにみえた。

何事も容易かったわけではない。実際のところ、アルベリッヒは人一倍訓練に励み、必死に勉強していた。カースでは、酒場の娘が結婚せずに産んだ子どもが生きていくには、軍隊に入る以外にない。行く場所も、職に就く当てもなく、仕事にありつけたとしても、せいぜい下働きがいいところだろう。

士官候補生に選ばれた者の家柄を〈代弁者〉が問題視することはない。彼らの唯一の関心は、その者の能力と、神と国に仕えるに値するかどうかだけだ。

しかしながら、軍隊は孤独な場所だ。かつてアルベリッヒは母に愛され、最大限の慈しみを受けていた。同じ境遇の子どものなかには、仲間と呼べる者たちがいた。だが、士官学校に友はなく、母親は彼との接触を禁じられた。「息子の気を散らしたり、目標に向かう純真な心を汚したりする」ことのないように、というのだ。

士官学校に入って以来、母とは会ってない。アルベリッヒが母よりも良い人生を送るにはこうするしかないと、お互いに理解してのことだった。それに、守られたかどうかは知る術もないが、彼が士官学校で優秀な成績を収めれば母に報酬が与えられるという口約束もあった。母が罪を重ねていなければ、小さな家くらいは持てただろう。彼はこの〈代弁者〉の言葉を信じた。〈代弁者〉が嘘をつく必要はなく、母が報酬を受け取る十分な理由があるのだから。

カースは士官を必要としていた。やる気のある士官を。親に充分な報奨金が与えられるとなれば、若き情熱のすべてを士官学校の勉強に捧げることを厭わない青年を必要としていた。

アルベリッヒは飛びぬけて優秀だった。同期生の誰よりも努力を重ねた結果だ。

（友だと？　友を作る暇がどこにあったというのだ？　夜明け前に起きて自主練をして、空いた時間はすべて年長者を相手に稽古を積んだ。そして、夕

食後には、司祭が真夜中の礼拝に訪れるまで、寺院のヴカンディスの角灯を頼りに勉強していた）

〈唯一神〉の司祭職にある者は汚れがないなどといった幻想を、アルベリッヒは抱いていなかった。堕落し腐敗している司祭は、高潔な司祭と同じ数ほどいるし、寛大というより、狂信的な司祭のほうが多い。アルベリッヒの暮らしていた山間の小さな村に属していた司祭たちが、賄賂を差し出してもっと大きな町に赴任していくのを、数え切れないくらい見てきた。〈唯一神〉の教令で厳しく禁じているはずの快楽を求めて司祭が村にやってきたときには、一度か二度、身を隠したこともあった。彼らが来ることも、自分を探すだろうこともわかっていたので、到着するずっと前から身を隠せたのだ。同じように〈代弁者〉が士官候補生の少年を探しに来て、自分が見出されて質問を受けることも確信していた。

使い走りの見返りに小銭をねだっても危なくない人物を見分けることもできた。

酔っ払いが厩舎に火をつけようとしたときも――。彼はどうにかうまくやった。いつでも寝台から飛びだせるように、眠い目を必死に開けて起きていて、時間になると井戸の水を飲みにいくふりをして中庭に出て、火が燃えあがったところを偶然に目撃した。

（どれほど酒場が賑わっていようと、子どもの叫び声は響き渡る。客がどれほど酔っ払っていようと、「火事だ！」と叫ぶ声が聞こえれば、適切な対応ができるものだ）

どういうわけかわかる――。これは、アルベリッヒの秘密だ。物事が起こる前に、それがわかるのだ。〈唯一神〉の〈代弁者〉が禁じている、悪魔の力だ。もしも誰かに知られたら――。

（焚刑に処せられ、浄化される。〈唯一神〉の寵愛を受けている者であれば、烈火に耐えて浄化された灰のなかから立ちあがるという。そんな奴を誰も見たことはないが）

予見的な幻影を初めて得たときから、この力は隠さなければならないと理解していた。このような力を禁ずる法があると知らずとも、わかっていたのだ。

何年ものあいだ、彼はうまく隠し通してきた。ところが、近頃は秘密にしておくのが次第に難しくなっていた。彼が内に秘めているこの力が、自由にしろともがくのだ。一度か二度、あまりにも強い幻影に呑みこまれて、一瞬ではあるが、周りのものが何も見えなくなり音も聞えなくなったことがあった。

彼が知る由もない出来事をなぜ知ったのか、話の辻褄を合わせるのが難しいこともある。たとえば、追跡している山賊が身を隠している場所や、隠れ家、逃げ道などについてだ。だが、幻影を無視するのも困難だった。とりわけ、知りえたことに基づいて行動を起こさなければ、罪のない人々が苦しむ場合には。

アルベリッヒはシルヴァーの首に勢いよくブラシをかけた。埃で鼻がむずむずとして、くしゃみがでそうになる。

もう一度、ブラシをかけようとしたそのとき、突然に平衡感覚を失い、頭が朦朧とした。幻影の前触れである眩い光が、自分の目とシルヴァーの首とのあいだに現れる。

（今はまずい！）シルヴァーの毛並みに必死にしがみついて、何でもない風を装う。今はまずい。ハダールが見ている――。

呪われた力は、今回も彼に従う気配はなかった。

（ああ――〈太陽神〉よ、助けたまえ！）アルベリッヒは〈太陽神〉を、その力と慈悲とを信じていた。たとえ、神の〈代弁者〉だと名乗る者たちの美徳を信じていなかったとしても……。

青白い光が輝き、視界を失う――。

ふたたび、視界が戻ってきたが、今いた場所ではなく、どこか別の場所を見ている。

（どこだ？〈太陽神〉よ、ここはどこだ？）

南へ逃げたと思っていた山賊の一団が、アルベリ

ッヒの隊の背後を密かに移動して北へ向かっている。ほかのふたつのならず者の集団と合流して、彼の隊と互角に戦おうというのだ。今は、戦いの拠点となる場所を探している。奴らが選んで防御を固めた場所に、アルベリッヒの隊をおびき寄せる気でいるらしい。

そこに住人がいることなど、奴らにしてみれば大した問題ではない。簡単に片づけてしまえるだろう。

溺れる者のようにシルヴァーの鬣に両手でしっかりとしがみついて、ほんのわずかな間でも幻影から逃れようとする。馬が首を後ろにまわして、訝しげにじっと見た。大きな茶色の瞳が、微かに青く輝く。まるで、半分隠された光の輝きを映しているかのようだ。

――瑠璃色の輝き。そのとき、アルベリッヒはついに幻影の見せている場所に思い当たった。山賊が狙っているのは、まわりを農地に囲まれた小高い丘の上にある、小さいが防備の固い村だ。

平時ならば、村の住人は山賊の奇襲など難なく撥ね除けてしまっただろう。だが、この村に向かっているのは、住人の三倍もの数だ。しかもつい最近、最高寺院の命によって、寺院の警備隊と軍隊以外における武器の所有が、簡略なものを除いて禁じられたばかりだった。

数人の司祭とひとりの〈代弁者〉を含む分遣隊がこの地を訪れ、短剣や農耕具、さらに水鳥などの小さな獲物を狩るのにしか使えない弓矢といったもの以外の武器を根こそぎ没収してから、まだ三週間も経っていない。しかも武器と一緒に健康な男たちの三分の一が常備軍に徴兵された。

武器が没収され、あるいは壊されているあいだに、村から引き立てられていく徴収兵に不測の出来事が起こらないよう護衛に当たったのは、アルベリッヒ自身の隊だった。そうだ、あの場所ならば、嫌というほど良く知っている。

住民に勝ち目はない。

山賊は茂みに覆われた渓谷を伝って、村に近づいている。

気づけば、アルベリッヒはシルヴァーの背に跨っていた。鞍をどうやって乗せたのかも、頭絡をどうやってつけたのかも覚えていない。

いいや、頭絡はつけていない。手入れをしていたときから、端綱をつけていた。角笛を手にしている。おそらくすでに角笛を吹いて召集の合図をしたのだろう。剣を装備したり、矢筒を背負ったりしながら、慌しく部下たちが走り寄ってくる。

琥珀色の光に視界を奪われ——幻影に引き戻されたアルベリッヒは、見たくない光景を目にした。どんな惨事が繰り広げられるかはわかっているのだ。どうして前もって目にする必要があるだろう？

山賊が村の防御壁に襲いかかり、村人たちの抵抗もむなしく突き破る。アルベリッヒは目を背けられなかった。幻影は目を閉じていようが開けていようが見えてしまう。見るよりほかにない。

すでに起きてしまったわけではない。それは、自分の名前をいうのと同じくらい確かだ。次の瞬間にも起きようとしているのでもない。だが、近いうちに必ず起こるだろうことだ。

山賊が村を襲い、抵抗する者に容赦なく斬りかかり、わずかな理性さえも投げ捨てて強奪の限りを尽くす。山賊のひとりが妊婦を捕らえて剣でひと斬りにし、母親を守ろうとした子どもまでも続けて斬り捨てたのを見て、思わず吐きそうになる——。

と、幻影から解放された。シルヴァーの背に跨ったまま、土埃と轟音に囲まれている。

駿馬の首にもたれかかり、サンズデール村に向かって隊を率いて全速力で駆けていた。踏み固められた道に蹄の音が轟き、とても会話できる状態ではない。駿馬が角を曲がるのに合わせて重心をずらすと、振動が骨にまで伝わってきた。

シルヴァーは疲れた様子を微塵も見せずに易々と走っているが、後続の馬はどれもついてくるのに精

一杯で、口角からよだれを垂らし脇腹にびっしょりと汗をかいている。轡をはめていなくても、この駿馬には何の影響もない。手綱と脚を使った合図に敏速に反応する様は、まるでアルベリッヒの考えが伝わっているかのようだ。

アルベリッヒはそう考えて沸き起こった落ち着かない感情を払拭した。これも悪魔の力なのか、などと考えなくていい。思考で馬を操ったことなど、これまで一度もなかったのだから。この駿馬がずば抜けてよく訓練されている、それだけのことだ。今はそれよりも気にかけねばならない問題に直面している。

一隊は、丘の頂に辿り着いた。サンズデール村はひとつ先の丘の頂にあって、幻影で見たとおり、その向こうには低木の茂る渓谷が走っている。

何も変わった様子はない。

（逃げる野うさぎのごとく急いでしまった）アルベリッヒはそう考えて、鳥肌が立つのを感じた。部下を召集し、はや駆けでここまで率いてしまったのだ。理由を説明できなければ、訝しがられるだろう。

（なんと説明すればいい？　緊急時にどれだけ迅速に行動できるかを確かめたとでもいうか？）苦しい言い訳だ。

アルベリッヒはシルヴァーを制止し、隊に止まれの合図を送ろうとした――こんなところで、馬を躓かせて怪我をさせてもしかたがない。

その瞬間、太陽の光が金属に反射して、山賊の居場所が暴かれた。左の手首にぶら下げていた角笛を摑み、右手で剣を引き抜く。攻撃の合図を送り、隊を率いて丘を下る。蹄と鋼は一気に坂を駆けおり、茂みに隠れて進む山賊の隊列に傾れこんでいった。

‡　‡

アルベリッヒは剣を手にしたまま、谷間の、草の踏み荒らされた岩がちな斜面に転がっている別の死体によろよろと近寄った。剣を突き刺し、確実に息の根を止める。剣を持つ手が重く、扱いにくい。胃

がむかつき、口のなかが酸っぱく感じる。

体力が残っていないわけではなかったが、戦闘が終わりつつあることを喜ばずにはいられなかった。この種の戦いは好きではない――そもそも、これが戦いなどと呼べるだろうか。肉屋のしていることと何ら変わりはない。

だが、必要な作業だ。人間の屑どもは、まるで本当に死んでいるかのような振りをすることがある。将校のなかには、この作業を怠ったために後悔する間もなく命を落とした者が何人もいるのだ。

シルヴァーはほかの馬と一緒にいて、サンズデール村の若者から食べ物と水を与えられている。この村で一番上等な飼い葉に、きれいな湧き水だ。そのまわりを何人もの少年がとり囲み、せっせとブラシをかけて手入れをしていた。

部下の兵士も食事を供され、村人たちにあれこれと世話を焼かれている。感謝の念が勝って、武器や大勢の男たちを失ったことなど忘れてしまったようだ。家族から男たちを徴集していった軍隊は、一転して敵ではなくなった。

あるいは、天罰が下ったかのように軍隊がどこからともなく現れたので、村人たちは〈唯一神〉が手を下されたのだと考え、感謝の印に自分たちが生贄に供されないよう用心しているのだろうか。ともかく、神の救いの僕を大切に扱うべきだと考えたにちがいない。

指揮官を除いては。彼はほかの者に任せる気になれない汚れ仕事を続けていた。

アルベリッヒはさらにふたつの死体を片付けると、ほかにないかと辺りを見わたした。

これで終わりだ。そう判断して、谷をさらに少し下ったところにある澄んだ水溜りに目を留めた。体を洗わなければ。手から血を洗い流し、鼻にこびりついた死のにおいを取り除きたい。

岩場を下りて水溜りに向かうと、それは雨水が溜まったものではなく、湧き水だとわかった。水面を

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。